
勇者ほど辛いものはない！

蒼月まさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者ほど辛いものはない！

【Nコード】

N3841L

【作者名】

蒼月まさ

【あらすじ】

目が覚めたら、勇者になっていた。隣には見たこと無い美女が裸で居るし。

高校生の雅夜が、勇者（未満）になって世界を救う？

お色気ありの異世界ファンタジー。勇者も辛いよね。

勇者、目覚める

「勇者さま、お目覚め下さい。もう、朝ですよ」

聞いたことのない声が聞こえる。女性の声だろうか、安らぎを思わず感じる声色だった。

だけど、母親にしては固い口調。他人行儀な言い方だ。

起こされるなら母親より、隣に住む幼馴染みのあの――。

「へ？ 勇者？」

全裸で寝台に寝かされている男――名前を高崎雅夜と言う。彼が目覚めるとま目の前には知らない女性が隣に寝ていた。それもなぜか、裸であった。

混乱する頭を何とかしようと、女性の顔を見る。

透き通るほどの白い肌に、潤んだ漆黒の瞳。絹のように柔らかそうな金色に輝く髪。まるで美術館にある女神を描いた絵画のような美しさがあった。

「あ、貴女は誰でしょうか？ と言うか、ここは何処？」

「もしかして勇者さまは、記憶がないのですか？ ……私はセシリア。この王国の騎士で、今は魔王を退治に遠征に出ている途中です」

「はあ？ ま、魔王！？ ち、ちょっと待ってくれよ！ ここは日本じゃないのか？」

雅夜の言葉に、セシリアはきょとんとした顔を向ける。

（な、なんなんだよ。魔王？ まるでゲームの中じゃないかよ！

そうだ！ 夢だ！ きつと夢に違いない！ 昨日徹夜でゲームしてたから、夢を見ているに違いない！）

頭の中で、無理やり言い聞かせると、雅夜は自分の頬をつねる。

「うっ！ い、痛い……と言うことは、夢じゃないのか……」

「勇者さま、大丈夫ですか？ いきなり頬をつねるなんて、赤くなってますよ」

細く綺麗な指が、雅夜の頬に触れる。とても冷たく、気持ちが良

かった。

頭の中がスーッと、冷静になるのを感じる。やっと物事を、冷静に――。

「ぬわあ！ あ、あの、セシリアさんでしたっけ？ 服を来て貰えませんか？」

雅夜も健全な男子である。目の前に裸の女性がいれば、自然に反応してしまう。

男なら、仕方ない整理現象だった。雅夜は前を必死に隠し、セシリアに懇願する。

「お願いですから、服を来てください。このままだと、俺は――」

「そう言うなら、服を着ましょう。勇者さまの体温が低下してたので、温めていたのですが」

すっと立ち上がるセシリア。身体にまとわりついていた毛布が、すり落ちる。小ぶりだが、形の良いバストが露になる。それ以外にも、いろいろはつきりと見えてしまっていた。

さらに膨張するのを抑えながら、なんとか見ないようにしようと思いを逸らす。まあ、脳裏にははつきりと焼きついているのだが。

側にあつた椅子に掛けてある布を手にとると、セシリアは手際よく身体に身につけていく。下着だろうか、簡素な布地を巻いているだけにしか見えなかった。

暫く待つと、きりつとした服を身に纏ったセシリアが、雅夜の前に現れる。

青を基調とした服が、セシリアの金髪をさらに際だててくれているようだ。

「これで、宜しいでしょうか？ 勇者さまの服も、すでに乾いているようです」

「乾く？ そう言えば、温めてくれたとか言ってたけど、俺は何処に居たんだ？」

「この宿屋の向かいの川に落ちてました」

落ちてましたって……雅夜には、全くそんな記憶は無かった。

「それで君が助けてくれたんだ。でも、俺は勇者じゃないよ」
「いえ、勇者さまですよ。これを持っていたんですから」
頑なに言い切ると、セシリアはある物を見せてくれた。それは――

携帯電話だった。雅夜が愛用している最新式の携帯電話。

「携帯電話が、勇者の証？　まさか、そんなの誰だって――」
「ここに書いてあるではないですか、ほら」

セシリアが携帯の画面を触ると、液晶画面に画像が出てくる。

そこには、『伝説の勇者・雅夜』と表示されていた。あれはメール画面だ。

「古代文字で『伝説の勇者』と書かれています。それにこの名前は勇者さまのことでしょ？」

古代文字――たんなる日本語だが、携帯電話に表示されているのは、ネットワークゲームの登録メールだ。『あなたも伝説の勇者になれる！』とかを、キャッチコピーにした多人数参加型ロールプレイングゲーム。それに登録した時の返事のメールだ。

それを、この女性が勘違いしたんだろう。いい迷惑だよ。

「一つだけ聞いて良いか？」

「私で分かれば、どうぞ」

「これって、ドッキリだよ？　まさかゲームの世界に迷い込んだとか、無いよね？」

「良く分かりませんが、勇者さまは私たちとは違う世界から、来たんでしょうか？」

真っ直ぐな瞳で、雅夜を見つめてくる。思わずドキッとしてしまった。

違う世界と言われると、何となく頷ける気がしそうだ。目の前の女性は、雅夜の世界ではないような絶世の美女だった。まるで、ゲームの世界に出てくるヒロインを、彷彿させてくれる。

もしかすると、本当にゲームの世界に入ってしまった。そんな気さえしてくる。

「そうなるね。来たって事は、帰れるんだろうし、暫くは楽しもうかな」

この時、雅夜はまだ混乱してたんだろう。色々、棚上げして、目の前の美女と仲良くなりたいたいなとか考えていた。この後、大変な事件に巻き込まれるとも、気づかずに。

勇者、初めての戦闘

見渡す限りの大自然。草原を吹き抜ける風が、気持ち良かった。今まで雅夜が住んでいた場所とは、全くと言って違っていた。田舎に行けば、こんな風景を見ることが出来るだろう。でも、雅夜には見るもの全てが、新鮮に映っていた。

もしかすると、自分はこの世界に来ることが運命とか？と、思ったりする。

その気持ちを何倍にも膨らませてくれるのは、目の前に歩いている女性――セシリアのお陰だった。朝起きてからずっと、一緒に歩いて親切にしてくれた。

「勇者も良いもんだなあ。美女と知り合えるんだもんな」

「なに言ってるのよ。雅夜様。勇者は大変なのよ」

背後から声を掛けられる。雅夜は振り向くと、黒い髪を後ろで結わいてる女性が歩いてた。

この女性はセシリアの仲間の一人で、ミリヤと言う。なんか神官見習いとか言ってた。

ゲームで言うところの僧侶や白魔道士――回復役といったところ。「でも、セシリアさんや、ミリヤさんが一緒だし、なんか楽しいですよ」

「楽しいか……まだまだ、甘いわね。君は異世界から来たんでしょ？ この世界の怖さが、まだ分かってないのよ。もし、分かったらそんなこと言えないからね」

ミリヤは白を基調としたローブをたなびかせて、雅夜のほうを真っ直ぐに見る。

柔和な感じの顔にしては、ミリヤの口調はきつい。雅夜を信用してない感じだ。

ほんのちよっと一緒にいただけで、雅夜にも痛いほどそれは分かっていた。

「その魔王って、そんなに強いんですか？　強いなら、大勢で向かえばいいと思うけど」

「強いに決まってるでしょ！　弱かったら、一々退治に行かないわよ。それに大勢の軍隊を率いるわけには行かない理由があるのよ」

「理由？」

ミリヤは足を少しだけ速めて、雅夜の隣に並ぶ。そして耳元で小さく言う。

「魔王の軍勢が、主要王国に攻め入っているのよ。そのせいで、本丸に攻め入るだけの軍隊を用意でかなくてわけ。それで、少数精鋭で魔王を討ち取る作戦に出たのよ」

身体に見合わない長剣を腰に携えているセシリア。ミリヤは優しくな目で見る。

「その精鋭部隊に選ばれたのが、あの子。セシリアよ。剣の腕だけなら、大陸で一、二を争うほどの猛者よ。あと私と、ほかに二人いるけど」

なんとなく聞き覚えのある話に、雅夜は首を傾げていた。

（なんか、最近同じ話を聞いた気がするけど、どこで聞いたんだろう）

思わず考え込んでしまうと、雅夜は何かにぶつかってしまった。なんだろうと、見ると――。

セシリアだった。道の真ん中で足を止めて、どうしたんだろう。

雅夜はそんなことを思っ、セシリアの顔を見る。

その顔には、先ほどまでであった優しい笑みは無くなっていた。

「どうしたんですか？　急に止まったりして」

「あ、勇者さま。その、この辺りに魔物の気配が致しまして」

（魔物だって！　ちょっと、聞いてないよ！）

少し慌てた様子で、雅夜は周りを見るが何も無いし感じない。

自分はセシリアみたいな剣の達人ではないから、仕方ないと言えば仕方ないけど。

その時、道の外れの草むらから、何かが飛び出してきた。

セシリアは腰の剣を抜くと、すぐに構える。それが凄く様になっている。

雅夜も、宿屋を出るときに貰った鉄の剣を鞘から抜く。ずっしりとした重さが腕を襲う。

なんとか両手で構えると、セシリアの隣に並ぶように前に出る。

「気をつけてください。あれはスライムです」

「スライム……あれが、スライムか」

目の前には、青いゼリー状の物体が、気持ち悪く蠢いている。雅夜はそれを見て、ニヤツとする。

スライム——言わずと知れた冒険物のゲームに良く出るゼリー状の魔物だ。大抵は弱くて、物語の序盤にするレベル上げで、よく踏み台にされている。

「セシリアさん、あれは俺に任せてください！ 勇者の力を見せませよ」

雅夜は勇者だ。勇者なら、幾ら初心者でもスライムには負けないだろう。それに軽く勝って、二人にいい所を見せたい。そんな邪な気持ちで動力になり、雅夜はスライムの前に出る。

「駄目です！ まだ、貴方は戦いに慣れてない——」

セシリアが前に出るのを、ミリヤが制する。

「いいんじゃないの。私も、雅夜様が本当の勇者が知りたいですしね」

これで邪魔する者はいない。雅夜とスライムの一対一の戦いが始まる。

と言ったものの、運動音痴の雅夜はどうすればいいか、分からなかった。とりあえず、適当に剣をスライムに振り下ろしてみた。

見事に命中！ スライムは真っ二つに——なってなかった。それどころか、剣がスライムの弾力で弾かれてしまった。

思わず、体勢を崩す雅夜。そこにスライムが、追い討ちに何かを飛ばしてくる。

咄嗟によける。雅夜は、自分が今まで居た場所を見て、驚いてし

まう。

「じ、地面が、こ、焦げてるよ!」

「気をつけて、スライムは溶解液を吐きかけてくるの。それに触れたら、火傷します」

そう言うことは最初に言っただけで、雅夜は思いながら、もう一度剣を構える。

剣道とかやったこと無いので、型はメチャメチャだ。テレビで見たことあるままに、剣を正眼に構えてみた。剣の重さで二の腕がプルプルと震えだした。

「ぎゅるるるる」

気持ち悪い声を上げながら、スライムは飛び掛かってくる。

そのまま雅夜の顔に当たる。スライムはゴムボールみたいで、あまり痛くなかった。

「なんだ、溶解液以外は大したこと無い。これなら、やれる」

スライムは再度、雅夜に向かって飛び掛かっていく。雅夜は待ってましたと、剣をスライムに突き出す。これで、スライムは剣に串刺しになるはず。

「勇者さま、あぶない!」

雅夜は目を疑った。スライムは空中に止まって、そのままの体勢で溶解液を吐き出してきた。

行き成りすぎて、雅夜は身体を動かせなかった。溶解液が掛かると思ったとき――。

目の前に美しい女性が、突然現れた。それはセシリアだ。

「だ、大丈夫ですか? 魔物は弱く見えても、奥の手を持っています」
セシリアは弱々しく、言う。その顔には、大粒の汗が噴き出していた。

布や肉の焼けたような臭いが、雅夜の鼻腔を刺激する。

「だ、大丈夫? せ、背中が、ひ、酷い事になって――」

「雅夜様! 危ない、早くよけて!」

ミリヤの声。その声にハッとして、前を見ると、スライムが溶解

液を吐き出そうとしていた。

完全に腰が抜けてしまって、動かない。雅夜は、その場にへつたと座り込んでしまう。

「くそ、あの勇者、なにしてんだよ！」

ミリヤの口調が一変する。

「主を、我に力を貸したまえ。セシリアの傷を癒したまえ！」

呪文みたいなのを、ミリヤは詠唱する。それと同時に、セシリアの周りが白く輝く。

（これが回復魔法……本当にゲームみたいだ）

「ミリヤ、ありがとう」

それだけ言うと、セシリアは手に持っていた剣を投げる。スライムに向かって。

溶解液を吐く前に、剣がスライムを貫く。気持ち悪い断末魔を上げながら、地面に落ちた。

「やったのか？」

「はい。スライムは魔物の中で一番弱いですけど、村人や力の無い者には驚異なんです」

雅夜に向かって、背中を向けるセシリア。幻滅されてしまったか。魔法で傷が治ったのか、セシリアの背中は綺麗だった。服は完全に溶けてしまったのか、上半身は裸になってしまっていた。下着すら、溶かされたみたいだ。

そんなことを気にしないのか、セシリアは剣を拾おうと、スライムが落ちた場所に向かう。

「勇者さまは、まだ弱いんですから、前に出ないで下さい」

（やっぱり、幻滅されてしまったようだ。勇者がスライム一匹に負けたから、仕方ないよな）

「だから、次の町に行ったら、私が剣の修行を見ます。だから、落ち込まないで」

と、言いながら、セシリアは剣を拾う。なんか、セシリアの耳が赤いような。

そして、雅夜のほうに振り向くと、神々しいほどの笑顔を見せてくれた。

笑顔以上に、雅夜は形の良いバストに目が釘付けだった。

「雅夜のスケベが！」

その声と共に、目の前が暗くなる。全くと言って、前が見えない。「勇者未満な奴が、セシリアの胸を見るなんて、百年早い。当分はそのままでいろ」

ミリヤが魔法で何かしたのか、前が見えない。てか、いつの間に呼び捨てにされてるし。

そんなことで、勇者（未満）雅夜の初めての戦闘は幕を閉じた。

勇者、裸の出会い（前編）

村の外れにある、山の中で素振りをしていた。

何故そんなことをしているかと言うと、少し前の戦闘にあった。

勇者としての素質の無さを、行きなりさらけ出してしまった。

セシリアは変わらず優しく接してくれるが、一緒にいるミリヤは露骨に態度を変えやがった。

「ふう。これで素振り百回もやった。今日は終わりだな」

「まだ百回『しか』してないじゃん。あと、百回はしないと駄目だな」

剣の修行を見てくださいと言ってくれたセシリアは、先に行ってしまった仲間と連絡を取る為に、どこかに行ってしまった。その代わりにミリヤが、雅夜のことを見張っているのだ。

人が真剣に素振りをしているところを、ミリヤはずっと嫌味を言い続けてくる。

なんて言うか、見た目は癒し系の顔をしているくせに、凄く腹黒な奴だった。

「セシリアさんは、とりあえず最初は素振り百回してと、言っただけよ」

「貴方は言われた通りにしか、やらないの？　勇者なら少しは根性見せなさいよ」

手に持っていた木の枝で、ミリヤは、雅夜の頭を殴ってくる。しなって意外と痛かった。

言われている事も一理あるので、渋々と雅夜は素振りを始める。

剣はスライムの戦いでも使った鉄の剣。ただ持つだけでも思いのこに、素振りを百回もした後では腕の疲れも重なって、さらに重量を増したように感じる。

すでに全身は汗でビショビショになっていた。

「ねえ、貴方のその服って、どこかの学校の制服なの？」

暇なのか、ミリヤは話しかけてきた。完全にため口になっている。「そうだけど、この世界にも学校とかあるんですか？」

たしかに雅夜の着ている服は学ランだった。濃い青を基調にした落ち着いた感じの制服。たしか、家に帰ったときに寝間着に着替えたと思ったけど、セシリア曰く、これを着て川に倒れていたと。余談だが、うちの学校の女子の制服は可愛い感じのセーラー服だ。

「貴方、馬鹿にしてるでしょ？　こっちにだって学校はあるよ。魔法学校だけどね」

「魔法学校……やっぱ、魔法とか教えたりするところなんですか？」
雅夜の言葉にニヤリとするミリヤ。急に立ち上がって、胸を張る。意外に巨乳だ。

「そうよ。世界中から優秀な者を集めて、魔法や剣術、色んな知識を教えてくれる場所。そこで私たちはトップクラスの成績を誇っていたの」

「私たちって言うと、ミリヤさんや、セシリアさんも生徒なんですか？」

「そうよ。魔法学校のトップクラスが世界を救うために、魔王征伐の命を授かったの」

豊満なバストを揺らしながら、ミリヤは満面の笑みを浮かべていた。

いつもなら目の保養にもなる光景だが、なんせ素振り疲れきっていた。

「なら、魔法学校の生徒や教師全員で、魔王を倒しに行けば良いんじゃないの？」

「あのね、前にも言ったけど今は戦争中なの。生徒や教師たちも、自分の国に戻って魔王軍と戦っているのよ。それに私たち四人がいれば十分なの」

（やっぱ、ミリヤの話はどっかで聞いた事があるな。ここまで出てるのに、思い出せない）

追加の素振りも五十回を過ぎようとしたとき、ミリヤは急に宿屋に帰ると言って雅夜の前から立ち去ってしまった。なので、残り五十回は一人寂しくこなしていた。

すでに日は傾き、辺りは赤く染まり始めていた。そこで重要なことに気づいた。

「宿屋の場所ってどこだ？」

セシリアやミリヤに適当に連れてこられたので、道なんか覚えていなかった。

周りは森になっていて、薄暗いし人の気配も無いように感じる。完全に迷子になってしまっていた。どうしようかと、雅夜は途方にくれてしまっていた。

「どうするかな。ここで待っているのが、いいんだろうけど……なんか出そうだしな」

生ぬるい風が通りすぎていく。汗で濡れた身体には、異様に気持ち悪く感じた。

その時、雅夜の耳に水の音が聞こえてくる。側に川でもあるんだろうか。

「この音の感じだと、そんなに離れた場所じゃないな。待ってる間に、水浴びでもするか」

川のせせらぎの音がするほうに、雅夜は歩いて行く。

十数メートルほど歩くと、森が開けて、その先に大きな川が横たわっていた。

川幅は結構あるが、意外と浅く、川の流れも緩やかだった。

「ちょっと冷たいけど、仕方ないかな。宿屋に帰ったときに、もう一度温かい風呂に入りなおせばいいしな。さっそく、服を脱ぐかな」
誰もいないことを確認して、雅夜は身につけている服を全て脱ぐと、綺麗に畳んで濡れないように大きな石の上に置いた。こういう時に、自分の几帳面な性格が分かる。

数回身体に川の水を掛けて、ゆっくりと足を浸けていく。

「おおお、冷たいぞ。でも、気持ちがいいぜえ」

真ん中のほうに行くと、深くなっていて、雅夜の腰辺りまである。そのまま頭まで、潜ってみる。水は凄く透き通っていて、魚が泳いでるのさえ見える。

雅夜は濡れた黒髪をかき揚げる。ピッタリと頭に髪の毛が貼りついてくる。

「川で遊ぶのは初めてだけど、楽しいものだな。うちの側じゃ無理だしね」

雅夜は独りごちりながら、上流に泳いでいく。運動音痴でも、なぜか泳ぎは上手かった。

小学生の時に平泳ぎで、学級で一番になったことさえあるし。

ほんの少し上流に行くと、大きな滝が見えてくる。凄い迫力だった。

「これは凄い！　滝なんて始めてみたよ。修学旅行に日光に行かなかったからな」

結構の高さから落ちてくる水、それが滝壺に吸い込まれていく。その時に弾ける飛沫と、上から落ちてくる飛沫で、滝の周辺は霧が出ていた。

その霧の中に、人影みたいのが動いているのを、雅夜は見逃さない。

「人でもいるのかな……ここじゃ見えないから、もう少し近づくな」

無防備にも雅夜は、そのまま泳いでいく。すぐに人影の正体が分かった。

それは――女の子だった。結構、華奢な体躯をしている。

滝の側に立っている女の子は、一糸纏わぬ姿で、水浴びをしていた。その光景は、どこかの有名な画家が描いたような、可憐の中に幻想的な雰囲気があった。

長い黒髪を艶やかに濡らして、小さいながらも主張している乳房は可愛らしくもある。

誰もいないと思っているので、全く隠さない少女の裸体を、雅夜

は十分に堪能していた。

端から見ると、単なる覗きだ。いや変態だ。というか犯罪だな。それでも男の本能で、見るのを止めることが出来なかった。それが敗因だった。

雅夜の足に、何かが触れる。そのせいで、思わず声を上げてしまったのだ。

「誰だ？ 誰がいるんだろ！ ……そこか！」

少女はずかずかと、こっちにやって来る。それも裸で。

それより、今の状況は最悪だった。覗きの上、こっちも全裸なのだ。アレも膨張してる。

言い訳不能。絶体絶命。今度こそ、セシリアに嫌われる。

お互いの顔が分かる距離まで、少女は近づいていた。遠くからは分からなかったが、可愛い。目が大きくてパツチリとしていて、セシリアと違った美しさがあった。

「……男？ 何でここにいる！」

「い、いや、汗を流してて、何となく泳いでたら、ここに來てしまっ……」

少女に返答しようと、雅夜は立ち上がる。深さ的には、脚が全て浸かるぐらい。なので――。

膨張したものが、少女には丸見えになってしまった。

少女の反応は早く、一瞬に顔は真っ赤になって、頭から蒸気が出るほどになってる。その目には汚いものを見せたたと言う、怒りの色で塗りたくられていた。

「ほう。貴様は痴漢だったのか。なら、この場で斬られても、文句は言えないぞ！」

「ですから、これは……たまたまで、なんて言うか……」

「うるさいわ！ 汚いものを起たせおって、それ事切り落としてやる！」

聞く耳も持たず、いつの間にか手には短刀を握っていた。何処から出したかは置いといて、今は逃げないと命が危ないのだけは、確

かだった。

必死に走って逃げる雅夜。その後から、少女が短刀を振り回しながら追っかけてくる。コメディ映画みたいに滑稽な状況だが、逃げてる方からしてみれば、ホラー映画な気分だった。

なんとか、自分の服を脱いだ場所に辿り着くと、服と一緒に置いた剣を掴む。

雅夜は一気に鞘を取ると、剥き出しになった刃を少女に向ける。

「俺は君を傷つけない。だから、退いてくれないか？」

「はん？ 剣を向けて退けとは……笑止千万。そんな構えで私に勝てると思うてるのか？ 私も馬鹿にされたものだな」

勝手に自分の世界に浸っている少女を、雅夜はどうしようかと考えていた。

逃げるのが一番だけど、ここでセシリアと鉢合わせになるのは、さげたい。

残るのは、説得と決闘。どっちも、望みは薄いけど、決闘でなんとか浅い傷を負って、負ければいい。相手も気が治まるだろうし、傷はミリヤに直して貰えばいいわけだし。

問題は痛いと言うことだ。と言っても、相手も本気で殺しに――。

「お前の罪は……万死に値する。死ね！」

（死ねですか……俺の人生は、ここで終わりなのか……）

少女は凄惨な形相で飛び掛かってくる。が、その時、森から何かが現れる。

勇者、裸の出会い（後編）

ミリヤかセシリアだと思って、助けを叫ぼうと見る。そこには大きなゼリーがあるだけだ。

（ゼリーだ。って、あれってスライムだろ？ でも、さっきより、大きくないか？）

心の中の自問自答に、少女は答えてくれた。

「なんで、ここにマザースライムが現れるんだ？」

「ま、まざーすらいむ？」

自分でも驚くほど、上ずった声を出していた。

「そう。本当なら、こんな場所に居ない……ん？ なんだか、奴は怒ってるぞ」

怒っていると言われて、雅夜はマザースライムを見る。たしかに小刻みに震えているけど、それはゼリー状の身体だからだと思ったが、口には出さない。怒られそうだから。

「でも、スライムだから弱いんだろ？ なら——」

喋っている最中に、マザースライムは何かを吐き出してきた。

「貴様！ 危ない！」

少女は咄嗟に雅夜の手を引っ張る。かなり強く引っ張られたみたいで、雅夜は少女の身体にぶつかってしまった。顔には、物凄く柔らかい感触が広がっていく。

「奴の溶解液は強力だぞ！ 気をつけないと——」

「や、柔らかい……このまま……死んでもいい……」

「なら、死ねえい！」

首筋に肘鉄を食らうと、顔面から地面に突っ込む。川原の石が痛い。

すぐに立ち上がると、自分が居た所を見る。思わず、息を飲み込んでしまった。

「な！ スライムの溶解液は、服を溶かすとか、火傷する位の威力

じゃないのかよ!」

地面が抉れていた。溶解液が掛かった場所全てが、綺麗に溶かされている。

「それは子供のスライムの話。あれはスライムの親、能力は比べようにならないほど、強い。まあ、私の敵では無い」

「なら早く倒してくれ! 俺はまだ死にたくない!」

雅夜の声に、少女は考える仕草をする。ほんの数秒だったが、可愛い顔だった。

答えが出たのか、元の仏頂面に戻る。そして、少女は口を開く。

「それは無理だ」

「おいおいおいおい! さっき、敵じゃないって言っただろう! 何で無理なんだよ!」

少女の答えに、雅夜は口早に捲し立ててしまう。それほど、焦っていた。

それを知ってか、知らないのか、ゆっくりと少女は答える。

「武器が短刀しかない。さすがに、それでは歯がたたない。それと――」

「それと?」

少女はマザースライムを見て、ニヤリと言う。

「あのマザースライムは、貴様だけを狙っている。私のことは眼中にないようだしな」

確かにそのようで、雅夜だけに、溶解液を吐きかけてくる。

「俺はスライムに恨まれる筋合いは――あった」

「貴様は何をしたんだ!」

「正確には俺じゃないけど、スライムを倒したんだよ。青い奴を」俺の言葉に、少女は「ははくん」と納得した顔をする。

「それは奴の子供だな。魔物でも子供を殺されれば、怒るものだ」なんとなく納得はするが、腕を組んで頷いてないで、助けて欲しいものだよ。

マザースライムは、少女が喋っている間にも、即死級の溶解液を

撒き散らしている。

それを雅夜は大きくよけていく。飛沫に触れただけでも、身体に穴が開くからだ。

「ふむ。幾ら痴漢でも、目の前で骨になるのは見捨てられん。今武器を取ってくるから、暫く待ってろ。そうしたら、一瞬で倒してやるわ」

頼もしい言葉。少女は裸で、滝へと戻ろうとする。が――。

行きなり、その場に倒れてしまった。

「な！ 粘着液か、油断した」

すぐに仰向けになる。足首にはネバネバした粘液が付着していた。そのせいで、倒れてしまったようだ。持っている短刀で、粘着物を剥ぎ取ろうと少女は振りかざすと――。

粘着液が短刀を持つ手に命中する。そして、地面とくっついてしまった。

「くそ！ これはまずいぞ」

最後の望みが、目の前で動けなくなっていた。仰向けのせいで、雅夜からは大事な場所が丸見えだ。こんな状況でなければ、最高の光景だろう。

「仕方ない、貴様の剣は意外と業物に見える。それなら、奴に傷を負わせれるはずだ。ある程度ダメージを与えれば、危険だと悟って帰るはずだ」

ご説明、ありがとう。子供のスライムにも勝てなかった雅夜が、親スライムに勝てるはずは無かった。それは、本人が十分に分かっていた。でも――。

「俺は……勇者だ」

そう呟く。少女に聞こえたらしく、変な顔を、雅夜に向ける。

こういう物語だと、危険になったとき、眠っている力が目覚める。雅夜はそれに賭けることにした。かなり分の悪い賭けだが、嫌いやない。

ゲームの中で幾度もなく、強敵を倒してきた。だから。

「ぎゅるるる」

マザースライムは大きな巨体を浮かせると、雅夜に向かって突っ込んできた。それは子スライムの三倍の速さだった。

「は、速い。まるで、彗星……赤い彗星だ……」

その頭部に角さえ見えるようだった。

冗談は置いといて、雅夜はその巨体を剣で受け止める。

真っ二つになってくれるかと期待したが、まるで大きな岩を受け止めたみたいな衝撃が両腕に伝わってくる。柄を握る手は、すでに痺れて感覚がなくなっていた。

なんとか我慢して、押し戻す。マザースライムはベチャッと音を立てて、地面に着地する。親になると、身体の硬さを調整できるみたいだな。

次はこっちから攻める。渾身の力で、叩き斬ればなんとかなる。

そう思っ て剣を見ると……あれ、あれ、あれれ。

（剣の刃が無い！ 無くなってるよ！）

マザースライムの体当たり耐えられなかったみたいで、すぐに押し戻した時、折れたようだ。最後に裸の少女を見て、幸せだ。

現実逃避をするために、少女を見ようとしたとき、声が聞こえた。

「雅夜！ どこよ？ 本当に手のかかる勇者なの」

全く心配してない声は、ミリヤだった。急に希望の光が見えてきた。

「ミリヤさん！ こっちです！ 俺はこっちで大ピンチです！」

こんなに大きな声が出せるのかと思うぐらい、大きな声で叫ぶ。

ミリヤは気づいて、森から出てくると身体を硬直させた。

たぶん……マザースライムを見てたからだろう……決して、雅夜が少女を襲い掛かっているように見えたからではない。そう思いたい。

まあ、裸の少女が倒れていて、そこに裸の男が側に居たら、現行犯だろう。

「雅夜……裸で……何をしてるの？ その子は、なんなの？」

出来るだけ笑顔で優しい声だが、目が、目が笑ってない。狂氣の目をしている。

「これは、なんていうか、後で説明しますから、今はアレを！」

目の前に蠢いているマザースライムを指して、ミリヤに言う。

ゆっくりと、ミリヤの目線が移動して、マザースライムを捉える。

「ち、ちよっと、何でこんなところにマザーが居るのよ！」

その台詞はすでに聞いてますので、何とかしてくださいと、心中で言う。

「ミリヤさん！ 魔法でやつつけてくださいよ！」

「私、攻撃魔法は使えないの。とりあえず、これを持ってきたから、使うの」

そう言えば、ミリヤは神官見習いなのに、手には一振りの剣を持っていた。その剣をミリヤは、雅夜に投げて渡してきた。

受け取ると、一番初めに驚くことがあった。それは軽さだった。

鉄の剣に比べて、その重さは十分の一ほどしかない。まるで綿毛のように軽い。

「それは私が魔法で鍛えた物なの。一種の付加魔法だから、切れ味は凄いものなの」

付加魔法——これは魔法剣みたいなものか、そう言えばゲームでもそんな魔法があった。たしかソロの時には便利だったような気がしたな。

雅夜は受け取った剣の鞘を抜き取ると、自ら光を放つような刃が露になる。その鋭さは、鉄でさえも真っ二つに出来そうだった。剣の達人なら、出来るんだろうけど。

この魔法の剣を構えて、雅夜は再度マザースライムに立ち向かう。その間にミリヤは、ぶつぶつと何かを詠唱している。

マザースライムはまた浮かぶと、雅夜に向かって飛ぶ。それを予想してたかのように、雅夜は剣先を薙ぐと、確かな手ごたえがあった。

今度こそ、マザースライムは真っ二つになっていた。二つになっ

たマザースライムは、力なく地面に潰れるように落ちた。

「や、やった！俺でも、魔物を倒せたよ！」

倒したことに、喜ぶ雅夜。だが。

「馬鹿か！奴はまだ死んでおらん！最後まで気を緩めるな！」
雅夜を叱咤する少女の声。マザースライムを見ると、二つがくっついて一つになる。

これはまさに反則だった。なんだ、このチートスライムは。すぐさま、剣を叩き込もうと振り上げるが、すでに遅かった。

マザースライムは溶解液を、すでに吐き出していたのだ。

目の前に迫る溶解液。雅夜は思わず目を瞑る。耳元で何かが焼けるような音が耳に入る。

死んだと思った。本当に思った。でも、身体の何処も痛くない。恐る恐る目を開けると、雅夜を包むように光の盾が現れていた。

「もしかして……助かったのか。って、やっと勇者の力が……」

「違うの！私が防御魔法を使ったの。私に感謝なの！」

（そういえば、魔法の詠唱をしてたっけ。本当に助かったよ）

「勇者さま……ここに居たのですか。それも裸で」

雅夜の耳に第三の女性の声が聞こえる。これはセシリアだ……なんだが、声が低い。

「剣の修行が終わったかと、見に戻ってみたら……裸の女性と一緒にここからだ、セシリアの前髪が邪魔で表情が見えない。想像はつくが。」

「ぎゅるるる」

空気を読まずに、マザースライムは甲高い鳴き声を轟かせる。

セシリアが何かをした。手を動かしたとしか、雅夜には見えなかった。

マザースライムの鳴き声は、唐突に止まる。本当に唐突に。

「勇者さまは、一体何をしてたのでしょうか？」

バラバラにされたマザースライム。あれだけ強敵だったのに、一瞬で葬った。

セシリアにしたら、目の前にいたら排除しただけなのだが、排除されたほうは堪らないだろう。その殺意のオーラを発しているセシリアは、ゆっくりと確実に雅夜に近づいていた。

「セシリアさん、聞いてくれ。これは、その、事故なんだよ。そう事故だよ！」

苦しい言い訳をする雅夜に、セシリアは微塵の慈悲を向けてくれなかった。

「セ、セシリア！ 彼女は、セシリア・ガブリエルなのか？ 私だ、橘瑞穂だ！」

この状況の原因の少女――瑞穂は、セシリアの名前を呼んだ。

「み、瑞穂？ なんて貴女がここにいるの？ 先生はどうしたの？」

「お父さんは元気だ。私がここにいるのは、魔法学校に入学する為だが」

なんか二人は知り合いだったようで、セシリアの殺意のオーラは無くなっていった。前髪で見えなかった表情にも、いつもの笑顔があった。

ここでやっと、助かったと、心から思ったのだった。

「雅夜……セシリアは純情なの、だから、怒らせると怖いの」

いつの間にか、ミリヤが隣にいて、耳元で教えてくれた。

（純情なのか……てか、次は確実に殺されるな……）

雅夜と瑞穂は服を来て、セシリアたちの案内で宿屋に戻ってきた。セシリアの両手に抱えるだけ、マザースライムの欠片を持って来ている。

その顔には、今日一日で一番の笑顔で輝いていた。雅夜は不思議そうに見るだけ。

答えはすぐに分かったが、今はとりあえずお腹が減ったので食事が先。

宿屋に入ると、すぐに一階の食堂に向かい席を占領する。そして、良く分からないメニューをセシリアに聞きながら、注文していくの

だ
っ
た。
。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3841/>

勇者ほど辛いものはない！

2010年10月28日03時11分発行